第４章　文化・伝統

１　祭　り

大高の祭り

大高の祭りは、氷上姉子神社の例祭で、「おひかみさんの祭り」として親しまれています。古い記録によると寛文（1661～73）のころすでに祭りが行われており、元宮に神輿渡御があり、馬の塔、傘鉾車、猩々があったと伝えられます。

氷上姉子神社に参集した山車

『尾陽村々祭礼集』には宝暦年中（1751～64）「八月朔日　馬の塔七疋　警固九十二人　同一疋　警固八人　込高新田より出郷内より神前へ引き渡す」と書かれています。記載によれば警固の人数だけでも100人を超え、馬の塔が中心の祭りだったようです。高力猿猴庵の『行事絵抄』には現在のような山車（松車・傘鉾車）が境内に繰り込む様子が描かれています。

八幡社に並ぶ山車　昭和56年

明治になって３日間、場ならし、試楽、本楽として行うことになりました。初日は山車をそれぞれの町内を曳きまわす町廻り。２日目は朝早く各町内廻りをして辻の秋葉社に山車が集結し、江明の御幣、新町の猩々、そして各町内の山車の順に津島社へ向かいました。午後は川向の山車を先頭に、山神社から長寿寺をへて八幡社まで曳き、夜までにぎやかに提灯を灯して秋葉社まで戻り解散。山車は各町に帰り町廻りをして終了しました。３日目は午前、中町廻りをして秋葉社前に集合。新町の山車を先頭に、氷上姉子神社の一の鳥居より境内に入り、神楽を奉納して元宮まで山車を進め、祠前でひとまわりしたあと帰路につきました。途中、新町の萬乗

醸造から本町の間に山車を止め、提灯を灯しました。

昭和34（1959）年に伊勢湾台風で大きな被害を受け祭りは１日となりました。新町、本町、高見、江明、田中、川向、中の郷などの山車（松車･傘鉾車）が祭庫から引き出され、朝早くから町内を笛や太鼓のお囃子で廻り八幡社（町屋川）に参集し､大高川を渡り辻（秋葉社）で休憩。梵天を先頭にええ猩々、花で美しく飾った山車の隊列は、山車を回しながら氷上姉子神社へと向かい込高が合流し、露店の並ぶにぎやかな境内に繰り込みます。神社では本殿前に山車が並ぶと祭事が行われます。

有松の祭り

有松には３輌の山車があります。いずれも名古屋市指定有形民俗文化財で、精巧な「からくり人形」を乗せた豪華な山車で、10月の第１日曜日に行われる天満社秋の祭礼では、からくりを披露しながら東海道を曳き回され、美しく幻想的な姿を競い合います。最近では６月に開かれる「絞りまつり」にも展示されています。

山車の横で天狗と戯れる子どもら

有松山車会館には、いつも３輌のうち１輌が展示されており、からくり人形を間近にみることができます。３輌の山車のうち２輌は、人形が文字を書きます。布袋車と唐子車に文字書き人形が乗っています。東町の「布袋車」は江戸時代に名古屋城下の大通りを曳かれた山車で､下玉屋町（中区）が建造した若宮祭りの祭車で、水引幕・大幕ともに豪華な刺繍で彩られています。中町の｢唐子車｣は天保（1830～44）のころに、知多の豪商が建造し､明治８（1875）年に有松が買い受けたものです。唐木づくりに青貝や珊瑚で細工に工夫を凝らした造りとなっています。西町の「神功皇后車」は明治６（1873）年に、有松が建造した

絞まつりでにぎわう東海道

もので、水引幕は四季の花が刺繍され、からくり人形は神功皇后と武内宿祢と神官で、神功皇后が鮎を釣り上げるようすを演じます。

西町山車庫から引き出された山車は、ゆっくりと東海道を進み、中町の山車、東町の山車と合流し、からくりを披露しながら松の根橋まで進みます。折り返しの有松・鳴海絞会館駐車場では３輌の山車が並んでからくりを披露します。

夜祭は提灯を掲げた山車３輌が待つ祇園寺前まで、町の東から東海道を笹提灯に小太鼓、鼓、笛で囃子ながら隊列を組んで向かう「囃込み」があり、隊列は山車に着くと、提灯で飾られた山車がゆっくりと動き出し、華麗な姿を見せながら東海道を練ります。

６月には有松商工会や有松絞商工協同組合を中心に行われる「絞りまつり」（６月の第１土・日曜日）が開かれ、ふだんは閉じられている東海道の街並みの格子戸が一斉に開けられ、絞りの販売や実演、絞り染めの体験、山車の展示ほか、町並ツアー、パレードなどさまざまなイベントで町がにぎわいます。

桶狭間の祭り

桶狭間には「桶狭間神明社の祭礼」と「桶狭間古戦場まつり」があります。神明社の祭りは、宝暦５(1755)年の『尾陽村々祭礼集』に、知多郡桶狭間村「神明宮の祭、馬の塔弐疋、郷内より神明迄引渡、祭日八月十六日、右社同村長福寺扣」と書かれています。馬の塔や傘鉾、音頭台の出るにぎやかな祭りが寛文10（1670）年ころから繰り広げられていました。

神明社に繰り込んだ笠鉾と猩々

祭りは８月15日と定められ、桶狭間だけでなく有松の祭りでもありました。有松に天満社が創立されてからは、別々に祭りが行われるようになりました。

祭礼は10月15日となり、さらに最近は、それに近い日曜日に行われるようになりました。祭礼は、南町、中町、北町、西町の４町内から、それぞれ梵天、傘鉾、音頭台、神輿の行列がにぎやかに出発します。神明社の入り口に集合し、その年の当番の町内から順に、お囃子と共に神明社に打ち込みをして本殿で式典。安全などを祈願します。境内では猩々も登場、神楽や太鼓の奉納があります。また、厄年の男子と還暦を迎えた年男達が、無事を祈願して奉納した餅を、櫓から投げる「奉納餅投げ」があります。大勢の人が競い合って拾う楽しみもお祭り行事のひとつです。以前は奉納された神馬が境内を走りにぎやかでし

たが、近年は中止されています。傘鉾は尾張藩主に見せるため大高、鳴海の傘鉾とともに熱田まで出かけたとされます。

万灯会

桶狭間古戦場まつりは、今川義元や桶狭間の戦いで亡くなった3,500人の将兵を弔い偲ぶもので、さまざまなイベントのほか、古戦場公園、七ッ塚、戦評の松で供養も行われます。平成15（2003）年からは、大池の周りに約3,500本のロウソクを灯す万灯会も開かれています。

鳴海の祭り

鳴海祭りの起源は定かではありません。しかし、朱鳥元(686)年の創建とされる成海神社。室町時代には鎮座していたとされる鳴海八幡宮の祭礼が中心ですから、古くから行われていたと考えられます。

鳴海のもっとも古い記録である『蓬東大記』には、馬の塔、傘鉾、踊りのほか、山車や釣り屋形などが記載されています。江戸時代のはじめまでは、表方、裏方という区別はなくひとつのお祭りを楽しんでいたようです。元禄のころ表方(鳴海八幡宮)、裏方(成海神社）がそれぞれお祭りをするようになったとされます。

提灯も華麗に本町に並ぶ山車

表方では各町内が知恵をしぼった出し物を披露していましたが、やがて傘鉾祭りとなり、笛や太鼓のお囃子がにぎやかに加わって囃子屋台（車）という形ができあがり、裏方では最初から山車祭りという形が整えられていきました。享保のころには、半田方面から山車を購入しお祭りに曳き始めたといわれています。

成海神社例大祭（裏方祭）は、丹下・北浦・城之下（きのもと）・花井の４輌の山車が町中を練り歩いて成海神社の境内に勢揃い。１輌ずつ転回させる神上げ神事が行われます。夜になると提灯を灯した山車は庚申坂へ向かいます。集結した山車は再び町内を練り歩き、それぞれの山車倉に帰ります。山車はすべて古い半田型で、豪華な彫刻と幕が目を引きます。

鳴海八幡宮例大祭（表方祭）は、東海道を、傘鉾、獅子、神輿、猩々と共に、作町・根古屋・本町・相原・中島の５輌の山車が繰り出します。これらのうち、からくり人形を乗せた相原の名古屋型山車（名古屋市指定有形民俗文化財）を除く４輌はこの地方で発展したもので、祭り囃子を主とした山車です。東海道を練り歩いた山車は、作町の交差点に集まり、東の宿場の入口である平部の常夜灯へ向けてゆっくり進んでいきます。また、夜になると、各山車が提灯を灯し曳かれます。ゆらゆらと揺れる提灯の灯はとても幻想的で、昼とは違った趣があります。楫取り連の衣装はとても粋で、腰に赤・黄・緑・豆絞りなど色とりどりの手拭をきれいにたたんで巻きつけており目に鮮やかです。

名古屋市指定有形民俗文化財　相原町の山車

近年の夜祭では本町に表裏９輌の山車が集まり、華麗な姿を見せていますが、平成25（2013）年の祭りでは、緑区制50周年を祝い、昼に平部に９輌が集結し、夜は本町に再び参集して、訪れた人たちを魅了しました。

もともと山車祭りとして整えられていたのは裏方だけで、表方では各町内による出し物や傘鉾祭りが行われていたところに、笛や太鼓の囃子が加わってだんだん囃子屋台（車）の形になっていき、今のように山車が引きまわされるようになったとされます。

また、秋には鳴海商工会を中心に鳴海宿場まつりが開催され、出店や山車の展示、猩々の人形の登場や住民の演奏や踊りの発表などで東海道の通り沿いがにぎやかになります。平成14（2002）年からは、８月に行われる「にっぽんど真ん中祭り」で鳴海ステージも開設され、区内からも多くのチームが参加し入賞しています。

2　猩　々

昔から鳴海・大高・有松・桶狭間の祭りに登場する「猩々」。この地域に伝わる特有の大人形で、その風貌は、大きな体に着物姿、赤い顔に茶色い髪の毛。竹で編まれた体に張りぼての頭部を付け、大人が中に入って担ぐと背丈はゆうに２㍍は超えます。

安永８（1779）年の『鳴海祭礼図』に祭りに参列する猩々が描かれており、江戸時代に猩々の存在していたことが確認できます。猩々の役割には２つがあり、１つは祭礼の警護と先導役で、もう１つは子供たちを追いかけて遊ばせるのが役目です。

熱田神宮本殿遷座祭に参集した猩々

大高の豪華な衣装の「ええ猩々」は、花車（山車）行列の先頭に立ちます。鳴海の「神様猩猩」は裃を着て神輿の先頭に立ちます。その他の猩々は子供らを追いかけ、作り物の手や棒でたたきます。猩々に叩かれた子供たちは「夏病しない邪気がとれる」などと言い伝えられています。有松には少し変わった「天狗」があります。猩々の由来には諸説ありますが、親が子供の無病息災を願って作りだした「愛情の化身」と考えると夢があります。

明治43（1910）年刊、伊勢門水（水野宇右衛門）著『名古屋祭』には「鳴海で有名なものは大猩々で背の高さは１丈23尺もあろうか、これに１斗樽位の朱塗り面に赤頭を長く垂れ、赤地平袖の着付に萌黄地の側繼と大口を着け、赤い大きな手をぶらりぶらりさせて闊歩しながらたまには其の手をもって往来人の天窓をお見舞申すと云う奇體千萬な作り物、其仕掛けは中へ大男が這入って自由自在に運動すると云う無雑さな中にも何處やらに雅味があるのでおかしい、そこで此猩々の起因を聞くに往古鳴海潟の時代に此海岸へ一疋の猩々が泳ぎ着いたことがあって夫れより浅間社の祭礼にこの猩々の模型を作り始めたもので随分と古い古い祭りであるさうな、夫れで維新前五十三次の宿場として遊女屋の軒を並べ繁盛を極めた頃には遊女共が此の猩々に追われて逃げ惑う様も一興であったと同所での古老」と書かれています。『小治田之真清水』の鳴海祭りの図には、行列の先頭に大猩々が出ているほか、七福神の作りものも描かれています。

猩々は平成21（2009）年の熱田神宮本殿遷座祭と平成25（2013）年の創祀千九百年記念奉祝奉納で子供たちと参加し、参道を練り歩きました。

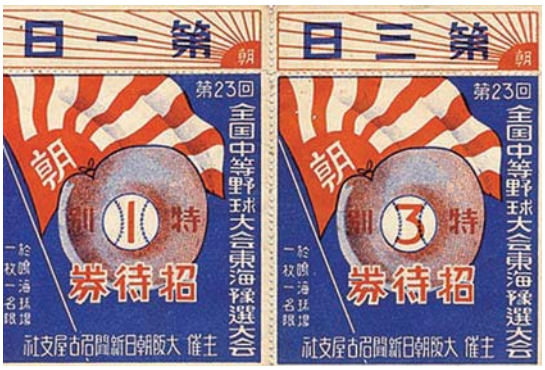
3　鳴海球場

愛知電気鉄道（現名古屋鉄道）が昭和２（1927）年に建設し愛電球場として誕生しました。日本で最初にプロ野球の試合が行われた歴史的な球場です。

プロ野球を観戦する人たち　昭和11年

初試合は昭和11（1936）年２月９日。名古屋に誕生したばかりの「金鯱軍」対「巨人軍」戦で「巨人軍渡米送別試合兼金鯱軍結成記念試合」と銘打って行なわれました。指定席１円50銭、内野席１円、外野席50銭。当日は雨上がりで、席も濡れグランドは泥沼状態でしたが、初のプロ野球とあって約１万人の人が詰めかけました。試合は10対３で金鯱軍が勝利して、翌日の試合を報じる新聞には「賞すべし金鯱の闘志、模範的好ゲーム、鳴海球場に揚がる歴史的歓呼」などの見出しが踊っています。

両翼106㍍、中堅136㍍で収容人員は２万2500人（改修して４万人）の球場では、昭和６（1931）年にはルー・ゲーリック、昭和９（1934）年にはベーブ・ルースら全米選抜チームが日米野球を戦っています。中等野球が開かれたり、高校野球の県予選やプロ野球（中日ドラゴンズ）の本拠地としても人々に親しまれましたが、昭和33（1958）年10月に閉鎖され翌年名鉄自動車学校に生まれ変わりました。



鳴海球場中等野球招待券

グラウンドは教習コースとなりましたが、内野スタンドは扇形のまま残され、三塁側のスタンド下は教習車の車庫、一塁側は教室や待合室として利用され、華やかだった中等野球の大歓声をしのぶことができます。

平成19（2007）年２月10日に開設80周年を記念して、金メッキのホームプレートと球場の歴史が書かれた案内板が設置されました。除幕式は近くの鳴海小学校の野球部員など50人が参加して開かれました。

4　伝統食

桶狭間の「たまりめし」

桶狭間で昔から祝や行事があると食べられるのが「たまりめし」ですが、いつごろから人気グルメとなったかは明らかにはなっていません。

桶狭間では江戸時代に家庭で味噌が造られ、その製造過程でできる「たまり」を味付けに利用していることで、そのころから定着したのではと考えられています。

食材は米、カシワ、ニンジン、キノコなど、すべて桶狭間で調達できるものを利用しています。米を釜で炊き、具を別に煮てたまりで味付け。炊きあがった米に、味付けした具を混ぜ合わせると「たまりめし」の出来上がりです。

大高の「藤竹飯」

大高で集まりがあると食べられるのが、ニンジンをメーンにした五目飯です。江戸時代に大高の通称「藤竹」さんが、好んで食べたことで評判となり、名前の由来となったといわれています。

調理は、多めのニンジンを油で炒め、次にカシワを加えて炒めあがったらシイタケ、ちくわ、こんにゃくなどを入れ醤油で味付けします。米は具から出る煮汁に水を加え炊き上げます。炊きあがった米に味付けした具を混ぜ合わせると「藤竹飯」の出来上がりです。昔、竈を利用していた時代は、大きな釜に米と具を一緒に入れて炊いていたそうです。

「藤竹飯」「たまりめし」には決まったレシピはなく、それぞれの家庭などで、具の材料や味付けも少しずつ違うようです。また、自家製の漬物とすまし汁が付きます。

桶狭間と大高の伝統食を紹介しましたが、有松、鳴海でもカシワや野菜を利用した、同じような「まぜごはん」が出されています。

5　年中行事

季節の行事や伝統とくらし

昔から人は自然に対する恐れや､自然の恵みに感謝しながら生活してきました｡なくなってしまったものを含め、緑区にあった、ある、さまざまな生活習慣や年中行事などを拾い出してみました。現代では理解することが難しいものもありますが、大人も子供も楽しく生活していた様子がひしひしと伝わってきます。

新　年

餅つき

餅は12月28日か30日につきます。29日は苦餅といってつくことを嫌ったためですが、フクモチ（福餅）でいいという人もいます。白い餅はひと臼で、ほかにキビやヒエを入れたり、ヨモギを入れたりした餅のほか、ソバの餅なども作りました。餅は水餅にして保存しました。仏壇には小さな鏡餅を供えました。

鏡　餅

12月31日に神棚２ヵ所（１つは秋葉さん)、仏間、床の間、クド、井戸、農具などに供え正月の３日間飾ります。鏡餅は床の間に大きなものを飾り、神様と仏様には小さなお鏡を飾ります。また、筵（むしろ）を敷いて、その上に、鍬、ビッチュウなど農機具をきれいに洗って並べ鏡餅を飾ります。供えるのはよく切れるように四角い餅を供える人もいます。丸餅だと「刃が丸くなる」と嫌うためです。30、31日に嫁が在所へお鏡さんを一飾り持参します。お鏡さんは三方の上にウラジロを敷いてのせ、シラガ（麻）を置き、コブ・串柿などを飾ります。家庭で餅をつかなくなったことで、実家にはお鏡料を持参することもあります。嫁が在所にお鏡さんを届けるのは、結婚して初めての正月のみという家と、在所の親が亡くなるまでという家があります。

煤払い

臼の下には新藁と大豆の豆木を敷いて餅つきし、そのあと煤払いをしました。藁と豆木と煤払いに使った竹のホウキは、ドンド焼きの焚き物となりました。

大晦日

飾りつけを済ませると、正月用のお節料理を重箱に入れて、残りを大晦日の日に食べました。この晩は、白米ごはんにゴボウ、人参、煮豆、昆布巻、数の子、田作り（生の物)、里芋・くわい・蓮根等の煮物を食べ、夜食として年越しそばを食べました。

注連縄

玄関の入口の上には短い注連縄をかけます。一夜飾りはいけないともいいますが、昔は31日にお飾りするのが決まりでした｡家の中の神棚には長い注連縄を３日間だけ飾り、飾ったあとは神社のかがり火で焼きました。

門　松

門松はずいぶんと昔になくなりました。戦前でも門松を飾ったのは大きな家だけで、あとは学校など公共の建物くらいでした。

雑　煮

大高は切り餅で中に大高菜を餅菜として入れました。かつて大高では大高菜の栽培がたいへん盛んで、京都方面にも出荷されていました。

打ち初め

農家では２日に仕事はじめとして鍬で一打ちしました。一株だけ打ち起こすことでこの年の豊作を祈願しました。

七草粥

正月７日には七草粥を食べます。七草にご飯や餅を入れ、これを食べると年中病気しないといわれます。大高では「唐土の鳥が渡らん先にナズナ七草合わせてチョキン、チョキン」と歌いながら包丁で七草を刻みます。

【メモ】

春の七草（セリ・ナズナ・ゴギョウ・ハコベラ・ホトケノザ・スズナ・スズシロ）粥を食べれば、１年間無病息災で過ごせるとされています。古くは七草を粥ではなく吸い物にして食していました。最初に七草の吸い物が登場するのは平安時代の『皇大神宮儀式帳』で、鎌倉時代には粥になり、江戸時代に一般にも定着しました。唐土の鳥は災難を除く鳥で、囃子歌は多くの地方に伝えられています。

春　１月～３月

ドンド・左義長

１月14日か15日におこなわれます。ドンド場という空地に門松、神棚のもの、正月飾り、お札、地祭りのときに使用した縄などを持ち寄って焼くもので、この火を使って鏡餅を焼いて食べると１年風邪をひかないとか夏病しないといわれます。また、煤払いに使用した青竹を燃やし、その燃え残りを家に持ち帰って庇や屋根に乗せておくと雷除け、火災除けになるといわれています。

初　午

稲荷社の祭日で、大高ではこの日に大高菜の辛子和えを餅と食べると小遣いに不自由しないといわれます。暦の上でこの初午の日が早いと火事が多いとされています。

節　分

大豆を家で煎って部屋に「福は内」「鬼は外」といってまきます。豆を年の数だけ食べるとされますが、子供たちが食べるだけで年を取ると食べませんでした。一般には、大須や尾張四観音に行くことが多くありました。ヒイラギの魔除けなどは昔もなかった

ようです。

【メモ】

平安時代には大晦日に宮中で行われていました。室町時代には民間に伝わり立春前日に行われるようになりました。鬼祓いに豆を使うのは、鞍馬山の鬼退治で、毘沙門天が「豆をぶつけるといい」と助言した伝説によるとされます。

弘法さん

３月21日は弘法さんの命日でもてなしがあり、子供たちがお下がりのお菓子をもらって歩きました。個人で弘法堂を持つ人もありました。

お念仏

春、秋のお彼岸にお念仏があり、当番が一軒ずつ回って念仏をあげていきました。昔は全戸を回っていましたが、大変なので一ヵ所に集まり、念仏をあげるように変わったところもあります。当番は１年で交代しました。最初に当番の家に集まり、そこから順に回ります。昔はもてなしがありました。すべての家が同じ宗派とは限りませんが、決まった般若心経などを唱え、葬式があると全員が手伝いに行きました。

夏　４月～６月

花祭り

４月８日はお寺さんで甘茶を飲みます。大高ではヤカンを持参して甘茶をもらい、家に持ち帰って家族全員でいただきました。レンゲなどで花御堂を作り、その中に誕生仏を安置し甘茶をかけます。釈迦の誕生を祝う法会で、甘茶（正しくは五色の香水）をかけます。甘茶で墨をすり「千早振る卯月八日は吉日よ神さげ虫を成敗ぞする」と書いて不浄などに上下逆に貼って虫よけにしました。

太々講

氷上姉子神社の春祭りに太々講が奉納されます。今は３月の最終日曜日におこなわれています。神楽は「式正・神がかり・かずらの舞・矛の舞・ほそめの舞・笑楽・式正」の７演目です。神楽をする人は熱田神宮から来るので、みんなでいつも見に行きました。

奉納される神楽

端午の節供

５月５日にはヨモギと菖蒲を風呂に入れました。ヨモギは手に入らない人もいましたが、菖蒲湯だけはどこでも沸かしました。男も女も菖蒲で鉢巻をしました。そうすることで夏病しないといわれます。風呂とは別に菖蒲とヨモギを２本くらい屋根に上げ、雷除けや火災除けにしました。男衆がやるものでした。今も内風呂の人は菖蒲湯をたてますが、屋根へ上げる人はほとんどありません。銭湯でもこの日は風呂に菖蒲やヨモギが入れてありました。

【メモ】

立夏・端午の節句は病気や災難を祓い、子供が元気に育つよう祈願するもので、ヨモギや菖蒲は農家の田植行事と重なったと考えられます。鯉のぼりが立てられるようになったのは、江戸時代で武家の旗指し物からとされ、出世祈願という様相が濃くなりました。

御衣（おんぞ）祭

５月８日、熱田神宮において神衣を献上する神事がおこなわれ、この日に種籾を蒔き、終わってから熱田神宮のオタメシを見に行きました。さまざまな作り物を見て１年の農業の豊凶を予測したものです。

祇園祭

旧暦６月16日、津島社の提灯祭りをしました。この日に川に入ると河童に尻ツボを抜かれると伝えられ、川に入ることは嫌われました。また、大高ではうどんを食べる習わしがありました。

頭人祭

チマキを手にする参拝者ら

５月10日。氷上姉子神社の祭礼で神社でご祈祷のあと、氏子らにお下がりとしてチマキが配られます。このチマキを玄関などにぶら下げておくと年中無病息災で過ごすことができるとされています。

お田植祭の際の提灯祭り

熱田の祭り昔は６月20日ころでした。それが終わったころにお氷上さんの御田植祭になりました。朝、集まってきた総代に振舞酒が出されます。秋葉神社前で小さな松明を燃やし、お参りした後、該当町内が用意する高張提灯（表に「大高」裏にその町名）を

先頭に、それぞれ町名を書いた弓張提灯を持ち、氷上姉子神社まで歩きます。氷上姉子神社では拝殿に入り、お祓いをうけ、引き続き酒・スルメで直会をし、それぞれの町内へ帰ります。一般の見物人は全くいなくて町総代だけの祭りです。

秋　７月～９月

盆の迎え

盆は旧暦７月13～15日でしたが、８月になりました。13日はオショロイサマのお迎えで、朝、お寺参りして、ご馳走料、お供え料などを納めました。お寺と同じものを家でもお供えします。迎え火は13日の３時か４時ころ、座敷前の靴脱ぎで瓦の上に松明を載せて焚き、座敷の戸を開けて煙が座敷に流れ込むようにします。

オショロイ様

オショロイ様の棚はガマ、マコモ、ムギカラなどで作ります。お迎え団子を供え、湯飲みにミソハギの葉を入れて供えました。タイマツの火は、このミソハギの葉で水を滴らせて消火します。花はシキビを必ず供え、あとは家々によって異なり、シラサキなどを供えます。また、ナスビでオショロイ様の乗る馬を作ります。馬の足は麻ガラです。麻ガラはオショロイ様の食事の箸にも利用します。供える食事で欠かすことができないのは大根の抜き菜（カイワレ）で、７月初めころにオショロイ様専用の大根の種を蒔きました。ネギなどの臭いのするものは出しません。送り火は座敷の上がり口に瓦を１枚置き、その上で松明を焚きました。オショロイ流しは15日の夕方７時ころ、ナスの馬、団子などのお供えを川に流しました。

台風除け

大風の時には洗濯竿など竹竿の先に鎌を縛り、さらにそれを物干し棒にくくりつけて、鬼門に当たる裏東の風の来る方角に向けて立てかけ、「ホーホ、ホーホ」と大声で風を追い払いました。大風は東風になるときが最も強い風になるので鎌先を東の方向に向けました。風は魔物であるから、魔物を鎌が切ってくれるとの言い伝えです。

雷除け

雷が鳴ると蚊帳を吊り、子供たちはその中に入れといわれました。線香を焚いて、おじいさんやおばあさんは「クワバラ、クワバラ」と唱えていました。田に落雷したことがあり、稲が焼けて黒くなっていました。火の玉が木を登っていく現象が見られたこともありました。

お月見泥棒

お月見泥棒は全国にあるようですが、緑区では徳重のあたりにだけに伝わる子供たちのお月見イベントのひとつとなっています。子供たちは月からの使者と考えられ、中秋の名月（十五夜）には、「供え物をとって食べてもおとがめなし」という全国にあった風習が伝承として残ったもので、昔は、お供えする側も、ススキを飾り縁側の盗みやす

い位置にお供え物の月見団子や里芋を置くなど工夫をし、子供たちは長い棒の先に付けた針金などで盗んだりしました。近年は畑も少なくなり、一帯が住宅地となったことで、家々が用意したお菓子をもらって回る行事へと変化していきました。一時は「泥棒」という言葉が嫌われ、さびれがちでしたが、風習を知った人たちが「子供たちの故郷の思い出づくりに」と、再び盛んに行われるようになってきました。子供たちはグループになって各戸を巡り、楽しそうに「お月見どろぼうでーす」と声をかけ、お菓子などをもらっています。

冬　10月～12月

恵比寿講・エベスコ

商家が商売繁盛を祝う。「エベスコ、スコタをはったろか」といって、商売をやっている人のところに行ってお菓子などをもらいました。また、嫁入りのあった家に行くと、子供の頭数でくれました。店の人は、ぼた餅などを配りました。

【メモ】

七福神（毘沙門天・福禄寿・寿老人・布袋・弁財天・大黒天・恵比寿）の中で唯一起源が日本の神様「恵比寿」を祀る催しが恵比寿講で、同業者や地域の人々が「講」という団体をつくり、祭りを盛大にするための資金を毎月積み立てていたところから名付けられました。恵比寿は海運守護の御利益があると漁民に信仰されていた神ですが、商売繁盛や家内安全、無病息災にも効果を発揮するといわれます。

ヤマノコ・山の講

昔は冬のヤマノコは旧暦11月７日か19日におこないました。春は２月７日か16、18日でした。夜に神社へ行き、ヤドで夕食を炊いて泊まりました。学校がある日でも、朝の行事をしてから学校に行きました。小学校の１年から６年までの男の子全員がヤドに泊まり込んだものです。布団が足りないので各自が持っていきました。ご飯は小豆を入れた握り飯でした。ヤドは順まわりで、子供がいなくてもやったものです。ヤドで風呂に入って泊まります。翌朝、お宮で、山から切ってきた竹を集めて燃やしました。子供が１軒ずつ回って浄財を集め、握り飯や菓子の資金にしました。たき火でおにぎりを焼いて食べました。

自然のおやつ

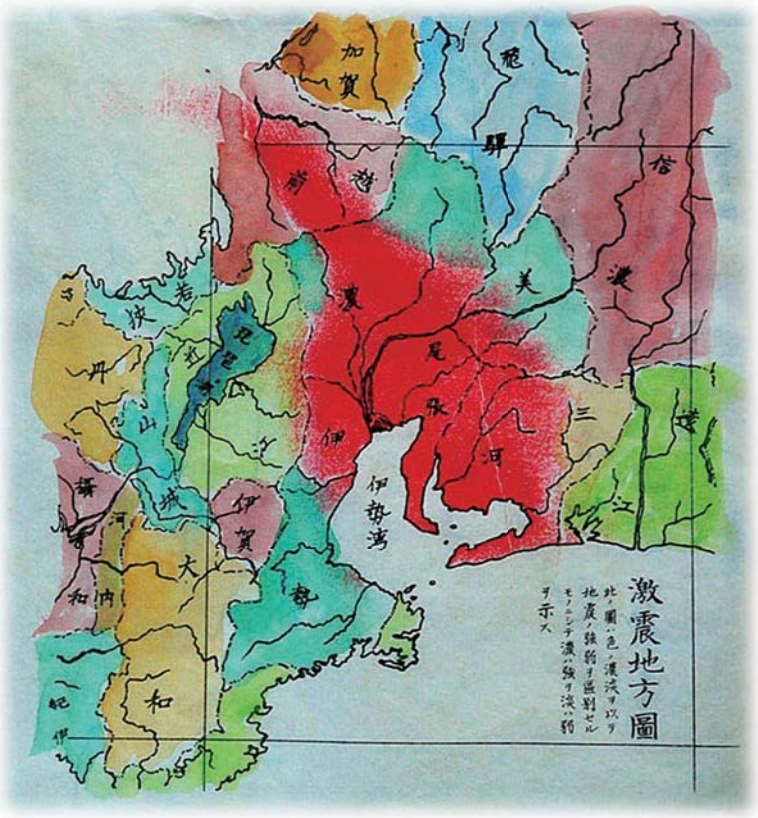
クワの葉は蚕が食べ、実は子供たちのおやつでした。子供たちは口の周りが紫色になるのもかまわずに食べました。野山にあるグミの実も食べました。キマンジュウ（アケビ）は林の中にはどこにでもありました。アケビの実の皮は赤茶色で、中に小さい種子がたくさん入っています。周りは白くあまり美味しくありませんが芽花も食べました。

6　災　害

濃尾地震

明治24（1891）年10月28日に「根尾谷断層」のずれで発生した日本最大級の活断層型地震Ｍ８です。岐阜・愛知を中心に大きな被害が発生しました。

鳴海・大高・有松に全壊の家屋のほか、鳴海で井戸水１～２㍍以上増水溢れ、瑞泉寺庫裏書院破壊。鳴海尋常小学校も校舎（脇本陣）壊れ、元役場と如意寺で分散授業になりました。東海道線浜松―米原間が不通、翌年の４月16日復旧。余震は翌年まで続きました。内閣府資料では、愛知郡の死者154人・負傷者263人、知多郡の負傷者は20人となっています。



気象台が作成した震災の被害地域図

伊勢湾台風

昭和34（1959）年９月26日、伊勢湾台風（台風15号）が、潮岬に上陸して北東に進み、愛知県・三重県・岐阜県に大きな被害をもたらしました。伊勢湾の満潮時と重なり、海水と強風による被害がたくさん出ました。この台風によって、名古屋市では死者・行方不明者1,909人、負傷者40,528人がでました。

南区や港区では、１ヵ月も水につかったままの状態が続きました。大高の込高では、南柴田新田（現東海市）の堤防が決壊して、海水が１階の天井まで入ってきて、13日間も水が引きませんでした。高見でも床上まできました。大高では14人が亡くなりました。

また、流された家は16軒、倒壊家屋は103軒、床上浸水は500軒近くありました。被害を受けた300人ほどが大高中学校（現在の大高北小学校）で、１ヵ月もの間生活をしました。鳴海小学校の児童の家は全壊45人、半壊141人、床上浸水48人の被害がありましたが、幸いにも死者はありませんでした。

津島社で伊勢湾台風の怖さを知らせる掲示版

伊勢湾台風は最大瞬間風速45.7㍍で、満潮時と重なった高潮が堤防を決壊させ、貯木場の流木を押し流し、家屋を押しつぶすなど大きな爪痕を残しました。東海三県では死者・行方不明者4,637人。被災者120万人という日本台風史上最大の被害をもたらした台風です。

大高寅新田の津島社に建てられている伊勢湾台風の解説と浸水の高さを知らせる柱。神社の屋根と比べても水の恐ろしさがわかります。

鳴海東部小学校の『創立120周年記念誌』には、学校の被害について「鳴海小学校から移築した、明治時代から使われた南校舎は、10度も傾き、ガラスは全てわれてしまいました。新校舎では、瓦が300枚、大ガラスが20枚もわれてしまいました。南の渡り廊下も全て壊れ学校のあちこちが使えない状態になってしまいました。家から学校まで来るのに、相原のところが水びたしになっていて、胸までつかりながらやっとの思いで学校にたどりついたという先生もいたそうです」と書かれています。

【メモ　滝の水公園】

モモ花の名所として親しまれる公園からの展望は「緑区一番」と評判です。朝日・夕日・夜景は素晴らしく、元旦には初日の出を見ようと多くの人でにぎわいます。

ここは昭和６（1931）年から同26（1951）年まで名古屋薬学専門学校がありました。そのあと、昭和34（1959）年９月26日に襲った台風15号「伊勢湾台風」のゴミが積み上げられ、整備されて公園となりました。北西角には腐敗したゴミから出るガス抜きのパイプが歴史を伝えています。